

筆山

第62号／2017年7月
土佐中・高等学校同窓会
関東支部会報

編集人/ 中平 公美子 (59回)
発行人/ 関東支部幹事長 市川 直介 (53回)
関東支部ホームページ:
<http://www.tosako-kanto.org/>



小村新校長からの「あいさつ」

「四十年前に中学野球部でノックを受けよった頃は、まさか校長先生になるとは部員の誰ひとりとして思っやあせんかった...」。校長就任に際して五七回、五八回生の中学野球部の皆さんからいただいた祝電の冒頭です。

この五七回生が中学三年の春に社会科の教員として着任してから、クラス担任、中学野球部・バドミントン部の顧問として、たくさん生徒・保護者の皆さまと出会い、お付き合いをいただいていた。さらに、広報や教頭としての仕事の中で、同窓の先輩・後輩の皆さまともたくさん新しい出会いがありました。こうした多くの方との「つながり」は私の大きな宝物です。冒頭の祝電は、まさにこの大きな宝物を改めて確かめさせてくれる、この上なくうれしいプレゼントでした。

百周年を間近に控え、土佐中・高等学校は大きな節目の時期を迎えています。そんな時期に、まさに「巡り合わせ」で、校長の任を命ぜられました。山本前校長が退任に際して、「伝統と誇りが灯った松明を後任者に無事引き継ぐ事が出来た」と述べられました。この灯火を消すことなく、新しい時代に、より輝きを増して引き継いでいくことが私に課せられた使命だと考えております。

その灯火とは、「人材の育成」という建学の精神の下、社会のさまざまな分野で活躍する人物を生み出してきた伝統に他なりません。新しい時代に相応しい人材を送り出すことができるよう、常に点検と改善を図りながら、学校運営に当たっていききたいと考えています。

同窓の皆さまには、これからも物心両面にわたりご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。また帰省なさった折には、お気軽に校長室をお訪ね下さいませよう、お願いいたします。

土佐中・高等学校 校長 小村彰

2017年 関東支部総会・懇親会

今年の総会の基調講演には、リョーマゴルフ社長の谷本俊雄さん（58回生）をお招きし、学生時代の活動やゴルフクラブ開発の軌跡、他に手掛けている新規事業など幅広い内容をお話いただきました。起業家精神溢れる谷本さんの講演に卒業生一同が刺激を受けたことと思います。

懇親会は、上久保沙耶さん（89回生）の美しいメゾソプラノの歌声と上久保さんご友人のピアノ伴奏から始まり、今年ご就任された小村校長先生のご挨拶と森郁夫支部長の乾杯の音頭で開会しました。その後は、よさこいチーム『陽』の紹介やまるごと高知の出張販売の案内に加え、今年のチャレンジ企画である『人間ビンゴゲーム大会』へと移り、いつにない「〇〇回生の〇〇です。番号は…」といった会話が繰り返されました。「ビンゴが出ないかもしれない…」等の運営側の心配をよそに、

見事ビンゴを獲得する参加者が続出し、7の会ゆかりの三酒造から届いた銘酒やリョーマゴルフからの提供品等を片手に、記念撮影を行いました。最後は校歌斉唱とエール交換、8の会への引き継ぎ式を行い、閉会を迎えました。

準備会では、支部役員の方はさることながら、他の会の先輩方からも多大なご支援をいただき、無事当日を迎え250名以上の卒業生にお越しいただきました。振り返るべき点はあるものの、参加された卒業生からは「土佐校で良かった。」、当日ご協力いただいた卒業生以外の方からも「土佐校って良いな。」等のご感想を頂き、運営側としてこれ以上の喜びはありません。また、本会の企画・運営を通じて、素晴らしい土佐校の卒業生に出会えたことに感謝申し上げます。有難うございました。

7の回一同より



二〇一七年記念講演

今年の関東支部同窓会の記念講演は、リョーマゴルフの谷本俊雄社長（五八回生）による「俊雄がゆく」でした。谷本社長は大学在学中に教材販売会社を起業し、その後、ゴルフ業界で一旗揚げたためリョーマゴルフを設立し、現在に至ります。大盛況だった講演の内容をご紹介します。

川上正衡（五八回生）

社名のリョーマは、谷本社長が坂本龍馬ファンであること、そして、一度聞いたら忘れられないものにと付けたものです。日本人は龍馬好きが多いので、瞬く間に世間に広がりしました。谷本社長は「高知出身でよかったと心から思っています。他県の出身であれば、恐らくリョーマを名乗ることなどできないからです。」

谷本社長の人生の教科書は「龍馬がゆく」。龍馬さんからは、知恵と工夫、実行力、胆力、絶対にあきらめない粘り、学びました。例えば、資金もないのに大洲藩に船を買わせ、事故で船が沈没するや、紀州藩から多額の賠償金をせしめた「いろは丸事件」はケーススタディとしては最適です。

中高時代はハンドボール部で酒井先生に鍛えられました。さまざまなことに興味を持つ性格ですが、勉強だけでは興味が持てませんでした。で、何をしていたかというと、中二の時、日高村の治水トンネル工事の手伝いで二トントラックの運転手。高でバイク免許を取得、バイクをプラモデル替わり分解組立。高三の時、大型バイクの免許を、さらに一発試験で車の免許を取得。ついでに、同級生に一発試験での車の免許取得方法を伝授し、十人を合格させました。

大学時代、やはり勉強だけでは興味が持てませんでした。で、何をしていたかというと、横浜本牧港での高級外車の船降りしや、飛び込み営業で二十万円もする教材の販売です。セールのコツをつ



かむまで、絶対にあきらめないと始めた教材販売は二十日間で契約なし、夜九時に最後の一軒と飛び込んだ先で初めての初契約。もし、最後の一軒のドアをノックしない、あきらめていたら、リョーマゴルフの社長になつていないと確信しています。その後は、大学二年で、全国五百人のプロセールの中で成績一位になります。大学三年では、大学生三十人を雇い、不眠不休で教材を販売していました。

大学卒業と同時に株式会社を設立し、その後十年、教材販売会社を経営。二〇〇〇年に「世界一飛ぶクラブを作る」ため、教材販売会社を売却、ゴルフ特許を、読みあさり、クラブの構造や製造方法、金属材料や加工技術に至るまでクラブ開発に明け暮れました。勉強に興味を持ったのは生まれて初めてでした。

最初に開発したのはゴルフの素振り用練習器「スイングプロ」です。累計十八万本のヒット商品ですが、発売当初はまったく売れませんでした。ゴルフショップが店頭においてくれなかったからです。そこで、龍馬さんから学んだ「知恵と工夫、実行力」です。どこのゴルフショップにも置いていないのに、広告を大量に出したのです。「お求めは、お近くの有名ゴルフショップ またはHPで」と。そして、全国のゴルフショップに「スイング何とかなんのは、注文できますか」と電話をかけたのです。結果、売れました。

「ここから、「世界一飛ぶクラブを作る」苦難が七年間続きました。」

二億円超の自己資金を使い果たし、ようやく完成したものの、十万円もするドライバーをどう販売するかが最大の課題でした。そこで、「知恵と工夫、実行力」です。「他の最新クラブより飛ばなければ、返品下さい」と。そして、全国のゴルフショップに「リョーマのドライバーはいつから入りますか」と電話をかけまくったのです。結果、売れました。コマースナルに、プロゴルファーではなく、有名ゴルフ好きを登用したのも影響は大きかったです。リョーマゴルフについての詳細は、Webサイトをご覧ください。

昨年末に、出身地の日高村に恩返しするため、リョーマの商品を利用した日高村ふるさと納税「龍馬チャレンジ」を開始、この半年で一億円が集まりました。恩返しもよいものです。

リョーマゴルフのドライバーは、今、世界（日本）でもっとも飛ぶと言われている、ビートたけし氏、原辰徳氏、安倍晋三氏ら数多くの著名人が使用しています。リョーマゴルフの縁で、先日、安倍氏と直接お話しさせていただきました。龍馬さんの時代なら、山内容堂候どころか將軍様ということになります。龍馬さんにも「おんしゃあ、まっことやるねえ」と褒めてもらえるかもしれません。







母 校 便 り 学校長 小村彰

●新体制スタート

校長の交替と校務分掌の部長任期が重なり、大きな人事異動を行いました。主な役職は次のようになっています。

校長 小村彰、教頭 岡松宏明（留任）
 武市暢久・松村誠（以上新任）、教務部長 有瀬豊（新任）、生徒部長 田村欣久（新任）、進路部長 藤岡優太（留任）、図書部長 入交一夫（新任）、特活部長 楠目博之（留任）、環境部長 吉野すずし（新任）、事務長 上田哲也（留任）、広報部長は松村教頭が兼任。また、学年主任は高三 久米将裕、高二 澁谷勉、高一 阿波谷博史、中三 福留正仁、中二 矢野弘純、中一 島内麻千子の各先生となっております。なお、今年度の新規採用は国語・数学・社会（地歴）の各一名で、フレッシュな風を吹き込んでくれるものと期待しております。



●島崎雄一先生ご勇退

数学科の島崎雄一先生が3月末をもって定年退職されました。先生は本校四五回のご卒業で、昭和五十年着任されて以来、数学の授業で指導力を発揮されるのはもとより、五四・五七・六三・六九・七三の各回のクラス担任を務めた後、平成十五年から十年間教務部長として、学校の運営に大きな貢献をされました。とくに、本校の最大の特徴である生徒の希望をかなえる選択制維持のための複雑で膨大な作業を担われたこと。また、本校高校入試について、それまでの推薦入試と一般入試を一体化させる新しい制度の実現に導かれたことは、先生の大きな功績として今後語り継がれるべきことであろうと思っています。先生の教えを受けた同窓生とともに、厚く感謝の意を表したいと思います。

●大学入試よく健闘、課題も

二〇一七年度大学入試の結果をみると、全体として、現役生（九二回生）・既卒生ともによく頑張ってくれました。とくに、国公立医学部医学科と自治医科大学の合格数が三八と、過去二十一年間で最多だった昨年と肩を並べる数に上りました。この数は全国の高校の中で二六位にランクされるものです。また、いわゆる難関十大学の合計合格数は四五となっており、しかも超難関である京大医学部に現役生が合格するなど、胸を張れる面がたくさんあります。ただ、一方で東大の合格数は二名、しかも現役生はゼロという残念な面もあり、高いレベルを目指す意欲とそれをかなえる取組みを一層強化していく必要を強く感じています。

●クラブも頑張っています

運動部・文化部もそれぞれハイレベルな活動が続けています。高校の運動部は、五月二十日から始まる県体でインターハイ出場を目指して戦いに挑みます。厳しい戦いになりそうですが、一つでも多くの部がインターハイ出場できるよう応援していきたいと思っています。一方、文化部のインターハイとも言える全国総文祭には、本校からオーケストラ・吹奏楽・美術・書道・放送・小倉百人一首かるたの六部門に合計四三名が参加することになっています（囲碁将棋は五月中に決定）。高知県全体の参加数が一七六名ですので、ほぼ四分の一を本校で占めていることになりました。今年の総文祭は宮城県で開催されますが、三年後、本校創立百周年の二〇二〇年の総文祭は高知県開催です。その中心を担うべく、さらなる発展を目指していかなければなりません。



こうした学校の取組みを進める上で、昨年スタートした新世紀募金にお寄せいただいた浄財が大きく役立っています。新年度からは生徒および教職員の海外研修制度を立ち上げましたし、ICT活用も着実に進めています。今後も皆さまの物心両面にわたってのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。



本部便り

四月十五日（土）、関西支部同窓会の前に行われた本部主催の本部支部連絡協議会では、本部からの報告事項の後、支部の現状や今後の検討課題について、大変意義のある意見交換ができました。各支部本部共通していた課題は、同窓会活動に六十回生代の参加者が少ないこと。また、大学を卒業されているであろう方が「在学中」のままになっていること。その解消に向けて、有効な提案がありました。実行できることから、やっていきたいと思っています。



同窓会本部二〇一七年ホームカミングデー総会は八月十日（土）に行います。筆山ホール講演は、母校の現役の先生、広井護先生（四八回生）にお願いしております。広井先生は昨年本を出されましたが、これがすごい人気で、さらに四月から高知新聞に「竜馬がゆく」のスリルとサスペンス」と題して連載をしています。実際に授業を受けた皆さんは、学生の頃にすぐに戻られることと思いますし、初めて聞かれる方も、文学作品の「読みのスリルとサスペンス」の魅力に引き込まれていかれることと確信しています。

今年は、丁度「よきこい祭り」の時期ですので、是非ご帰省され、合わせて存分にお楽しみ下さい。3月に高知城前にオープンした「高知城歴史博物館」（写真上）も人気スポットになっています！

同窓会本部 会計
千頭 裕（五八回生）



前厚生労働事務次官の村木厚子さん（49回生）が4月1日付で理事に就任されました

関東支部便り

■総会のご報告

六月三日（土）霞ヶ関ビル東海大学交友会館にて、小村彰新校長等をお招きして、総会が行われました。活動報告や会計報告のほかに、年間会費についての議案が審議され承認されました。同窓会の財政基盤の強化と事務負担の削減に繋がります。また、会計として新役員に山下通子さん（五三回生）が選任されました。

■新第十四条

年間会費は一口三千円とし、会報の発行をはじめ事務連絡費・通信費など運営資金に充てる。ただし、学生からはこれを徴収しない。

（施行 平成二十九年六月三日）

■記念講演

今年は、株式会社リョーマゴルフ代表取締役の谷本俊雄さん（五八回生）のご講演。高校生の頃からのビジネス感覚や、開発商品の販売戦略。そして出身地日高村への貢献などお話しいただきました。

（関連記事を三ページに掲載）

■懇親会

東京藝術大学の音楽科四年生の上久保沙耶さん（八九回生）の迫力ある美声から懇親会が始まりました。総勢 百五十名のピングカードを使った友達作り企画に、会場内をうろうろ。大いに盛り上がりしました。

■その他

はちきん会のおしらせ

十月十四日（土）十五時半から竹芝橋出航のヴァンティアン号トワイライトクルージングにて行います。

ご講演は、ライオンのCSR推進部長兼企画担当部長の小竹由紀さん（51回生）です。お友達をお誘いの上、奮ってご参加ください。



学生・社会人交流会のおしらせ

十一月二十五日（土）午後二時受付開始
東京大学駒場キャンパス
生協食堂二階 ダイニング銀杏
学生千円・社会人三千円

お手本にした土佐高の先輩がきっといるはず。まずは交流から始めましょう。

学生・若手社会人交流会

2016年11月5日



若手の会の起り

「関東支部をはじめ土佐高校の先輩方にはすばらしい方々がおられるのに、関東支部総会での基調講演・懇親会だけではもったいない！」という七十回生小松岳志先輩（森・濱田松本法律事務所パートナー 在シンガポールオフィス）の強い思いから、「学生・若手社会人交流会」はスタートし、二〇一六年十一月開催で第十回の節目を迎えました。本会は土佐中・高等学校同窓会関東支部公認の会として若手有志で運営しています。

関東支部総会の場合ですと、大先輩が多く、学生・若手社会人はどうしても恐縮してしまいがちです。

そこで小規模（また安価）に、しかしながらコンテンツは普通ではなかなか聞けない諸先輩方の価値のあるお話しを提供し、その後の懇親会ではしっかりと自分の意見を聞いてもらったり、交流を図ってもらえることを大きなテーマとして開催してきました。

二〇一六年十一月開催は 第十回の節目の年であった

第一回の尾崎知事のご出演から始まり、現関東支部長であられる四一回生の森郁夫先輩（当時 富士重工業社長）にもパネルディスカッションでご登壇頂きました。

十回目の節目の年となった今回は、幹事一同で再度会の趣旨、今後の方向性をしっかりと議論しました。

学生・若手社会人に伝えたいメッセージ・



テーマを明確にし、ご登壇頂く先輩方も、例年に比べると年齢層の若い、広い分野の先輩方をお招きしたパネルディスカッションとなりました。

学生・若手社会人には、分かり易く、実践し易い内容をお話し頂けたと考えています。

若手の会の今後について

継続は力なりの精神です。まずは続けていくこと、根本の大きなテーマは変えることなく、一方でマンネリ化することのないように、激変していく時代を捉えたコンテンツを幹事一同で議論し、提供していければと考えています。

ご参加頂けないと会は開催できませんので、是非多くの卒業生に本会の存在を知って頂き、ご参加頂けますと幸いです。必ずや得られるものを提供できると自負しております。

また、幹事も一年一年歳をとりますので、会の趣旨に賛同頂ける若い後輩にも是非幹事として参加して頂きたいですし、次世代へバトンを渡しながら、定番の会として続けていければと考えています。

最後になりますが、これまでご登壇頂き、また後方で多大なるご支援を頂きました諸先輩方にはこの誌面をお借りし、あらためまして御礼を申し上げます。

若い力で運営している会ですので、時として方向を誤ることがあるかもしれません。引き続きご指導、ご鞭撻を賜ります様何卒宜しくお願い申し上げます。

幹事一同（加藤丈典・七六回生）

二〇一六年十一月五日、学生・若手社会人交流会イン二〇一六が開催されました。今回の交流会は、一部がパネルディスカッション、二部が懇親会という二部構成で行われました。私は、パネルディスカッションで、当日のモデレーター（司会）を務めさせていただきました。八三回生の結城優と申します。当日の様子等について簡単に紹介させていただきます。

パネルディスカッションは、「私たちが三十歳までの土佐高生に絶対伝えたいかった仕事の話」と題して、NHK職員の三浦先輩、フィギュアイラストレーターのデハラユキノ先輩、弁護士・歯科医の堀内先輩と、様々なジャンルの第一線で活躍中の三名の土佐高の先輩方をパネルとしてお招きしました。「三十歳までの土佐高生に」ということでしたが、私自身二十代であることもあり、当日を大変楽しみにしていました。

パネルディスカッションでは、今までにない試みとして、開始直後にパネルの方々と参加者全員での乾杯（！）を行いました。これによって、口が滑らかになったパネルの方々から、「そんなことまで！？」というような話を引き出すことができ、また、会場の参加者との双方向の交流にも繋がりました。土佐高出身の皆さんなら、お酒でも呑みながらざつとばらんに話したときの方が、面白いアイデアが出たり話が盛り上がりたりすることは、経験としてご理解いただけるかと思います。ただ、モデレーター（司会）としては、時間配分を気にしながら、口が滑らかでいくのには苦労しました…（笑）

パネルディスカッションの後には、懇親会が行われました。印象的だったのは、大先輩の方々からも、「パネルディスカッションみよったら、若い人たちのエネルギーをもらったわ！ありがとう！」と「言ってもらえたこと」です。「三十歳までの土佐高生」に限らず、すべての参加者に意味のあるパネルディスカッションとなったことを大変嬉しく思います。

（結城優・八三回生）



パネルディスカッション

感想やご意見をいただきました

講師のみなさまがパーソナルエリアの的を瞬間的にすっば抜く人間力は魅力的でした。また、その準備にご苦労されたということも印象的でした。段取りごろうさまといいたいです。

自分に合った仕事に就くには、他人からのアドバイスや恩師との関わりを大切にすること。独身ならば、転職の時期や方向性も自分を信じてみる。他人の人生や人生観を聞く機会の大事なこと。いろいろ発見がありました。

若手社会人だけでなく、中堅、経営者層など、幅広い年齢層の交流も考えたらどうでしょうか？若手同窓生の関わりが広く深くなることを期待しています。

例年とはかなり雰囲気の違う会になりましたが、ざつとばらんに先輩方の学生時代のお話や現在の仕事などをお伺いすることができ、学生の方にとっては、社会人が少し身近に感じられるような会になったのではないかなと思います。若手社会人としても、少し先を走る先輩のお話を伺うことができ、とても参考になりました。来年以降もパワーアップした会にしていければと思います。



一つのキャリアコースを突っ切っていく感じの方はいらっしゃるが、結局そのようなレールに乗った順当な生き方でない生き方をするのは難しい。その中で様々なコースを生きてきた方の話を聞けるのは有意義だった。

高知県からの参加でした。高知を出て活躍されている方がどのように外の世界と関わり、高知や土佐高校をどのように見ているのか少し知ることが出来て興味深かったです。県外在住の土佐高校の卒業生は、これからの母校や高知にとって、とても大切な存在です。関東支部の活動が今後ますます活発になることを期待しています。

十一月五日に行われた土佐高若手の会にひょんなことから参加させて頂きました。参加のきっかけは同級生のデハラユキノリから、今度、土佐の後輩と一緒に飲むという誘い。その誘いを安易に受けてしまい、予想もせず若手の会のパネラーとして参加せざるを得ないことになってしまいました。

私の経験を話すことが後輩たちの役に立つかどうかはわかりませんが、就職活動や転職活動についてならば、興味があるのではないかと思います、どんな就職活動をして、どうして転職したかについて話させて頂きました。

自分の就職活動中、いまでも印象的に覚えているのは、銭湯で知り合ったおじさんが、「わしら、定年になってからこの仕事で自分に合ってたかどうか考えるのに、大学生やらが『この仕事がいちばん』てわかるかい。」と言われていたことです。『この会社で働きたい』と思えるのはもちろんすばらしいことですが、そういった考えのせいで自分の可能性をせばめてしまうことは実にもったいないことです。

若手の会に参加していた後輩たちには、志望する会社や業界をせはめることなく、目一杯頑張つて欲しいことを伝えました。興味の無い業界の説明会で学んだ内容が、志望している会社の面接で生きるかも知れません。

三十代前半、外資系保険会社からテレビ局へ転職しました。十年近く営業職を務め、営業以外のスキルを身に付けようと、社会人大学院で学んだことが転職のきっかけになりました。いまでも、フルタイムで働きながら大学院とは我ながらよくそんなエネルギーがあったものだと思います。

そんなエネルギーがあったのも、高校、大学といった学生時代に全力で遊んだからだと理解しています。四十代になり、周りの同級生の活躍を見ると、勉強でもサークル活動のような遊びでも学生のうちに懸命に何かに打ち込むことが、社会人になってからのエネルギーとして活きるのではないかと考えるようになりました。後輩たちには学生時代にしかできないことや、若いうちにかできないことを頑張つて欲しいと思います。

期せずして、この会に参加させて頂き、母校との繋がりを久しぶりに感じる事ができました。二十歳以上も歳のはなれた後輩たち、顔も名前も知らない後輩なのですが、やはり母校の後輩はかわいいものです。かわいい後輩を少しでも励ますことができたのであれば、参加してよかったのではないかと思います。

(三浦聡樹・六八回生)



私たちが30歳までの土佐高生に絶対に伝えたかった仕事の話

パネラーの皆様、幹事の皆様、今回より始まった新しい企画、大変面白い企画で楽しい時間を過ごすことができました。特に今回は同世代がパネラーで、転職をする勇氣も力もない、芸術のセンスない、たいした資格もない自分には、同世代の先輩、後輩の活躍が刺激となり、頑張ろうという気持ちになりました。

高知を離れ早や20年、高知の話、土佐の話ができるのも同窓生の集まり位です。アラフォーながら、若手の会に都合がつけば参加させて頂いております。参加資格は「若手だという気持ち」ですので、皆様もご参加を。

たくさんの参加者から

とても面白いディスカッションでした。集客には肩書も重要ですが、内容はパネリストのパーソナリティ・経験によるところが大きいですね。

パネルディスカッションも非常に面白く、飽きずにタメになる情報をたくさん聞かせていただくことができました。その後の立食でも何学年も上の先輩方から有益なお話をたくさん聞くことができて良かったです。非常に面白く有益な会でした。



人と人が直接出会う場を作るのは、そもそも手間がかかることだと経験上思います。その手間を惜しまず、出会いからしか生まれないものを期待して、今後続けていただければと思います。

自分の東京での大学生時代・20歳代・30歳代に、こういった同窓の先輩・後輩と土佐弁で素直に話す機会があれば、自分の日々の過ごし方や仕事・生活についての視点のヒントになったかも、と思いました。その意味で、自分の過去の、特に失敗話が、後輩の皆さんの何らかの参考になるのであれば、これまでそんな立場ではないと考えてきましたが、今ぐらいの年齢になると、そういう場に出て行くのも少しは意味があるのか、と考えさせられました。



一般社団法人
土佐婚倶楽部®
TOSAKON CLUB

婚活のお悩みを心を込めてサポート致します
年に数回、**合コン**等やってます！詳細はHPで

代表理事・東京相談室長 織田祐輔 (45回生)
顧問弁護士 浦田理有 (76回生)

URL <http://tosakonclub.com/>

東京相談室 042-521-2020

〒190-0012 東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル402



「日本人のおなまえっ!」裏話 森岡浩(五五回生)

四月からNHK総合「日本人のおなまえっ!」という番組に出演しています。

これまでも「名字」を取り上げた番組に出演してきましたが、「名前」そのものをメインテーマに据えて、毎週放送するというのは初めてのことでないでしょうか。しかも、毎週木曜日「七時のニュース」に続いて放送というゴールデンタイムですから驚きです。

もちろん、いきなり決まったわけではありません。一昨年、昨年と二回にわたって特番として放送し、それなりの反響や視聴率があったことから定時化したもの

です。実は最初の特番に呼ばれた時から、担当ディレクターは「将来的にはレギュラー番組にし、毎週放送を目指しています」と言っていました。正直「何言ってるんだか」という感じだったのですが、三年後に本当に毎週やることになりました。しかし、本当に驚いたのはそんなことではありません。収録開始直前、実質的に仕切っているディレクターから、レギュラー番組の開始にあたって「チーフプロデューサーにご挨拶を」と言われてエライ人に会いに行きました。その、番組全体を統括している国見太郎チーフプロデューサーは、なんと土佐校六四回生でした。「日本人のおなまえっ!」は土佐校OBで成り立っているのです。※小学館より「名字でわかる あなたのルーツ」好評発売中



原宿・表参道スーパーよさこい 8月27日(日)

土佐校生十四人
過去最多の参加です

八月十八日に来日するガーナ高校生二人にとつて、今年が特別な年です。独立六十周年、日本・ガーナの国交樹立六十周年、更に医学の恩人野口英世博士のガーナ上陸九十周年にあたるからです。この節目の年に東京と福島県猪苗代(野口博士生誕地)で行われる両国学生の交流取材するため、ガーナ国営テレビのクルーも来日します。

土佐中学・高校生十四人(過去最多)も上京、東京交流最終日の八月二十日(日)には、都内高校生やガーナ高校生と共に「原宿・表参道スーパーよさこい祭」で演舞を披露します。テレビカメラの前でいっそう張り切る「ロッテ・ガーナよさこい連」に声援をお願いいたします。

(午前十一時四十分
表参道行進トップスタート)

ガーナ高校生交流はお陰さまで十四年目。皆様の物心面でのご支援に感謝申し上げますとともに、今後とも宜しくお願い申し上げます。日程詳細は後日関東支部ホームページでお知らせします。

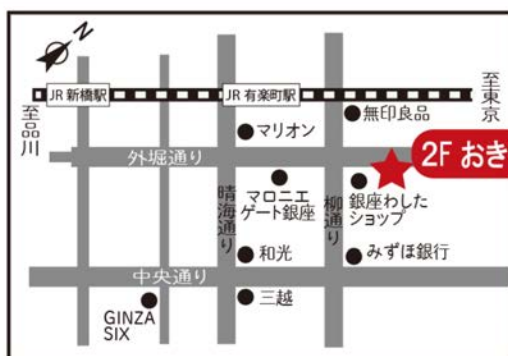
ガーナよさこい支援会

代表 浅井和子(三五回生)

事務所電話 03(32334)3838



2016年 演舞の合間に友達同士



www.marugotokochi.com/

TEL 03-3538-4351 (サンゴ・血鉢・ヨサコイ)
〒104-0061 東京都中央区銀座1-3-13

おきやく
TOSA DINING
一般財団法人
高知県地産外商公社
アドバイザー
濱田知佐(56回生)

筆山会 新年会



筆山会の新年会が一月十四日に新日鐵住金代々木倶楽部にて行われました。

森健さんの挨拶の後、森郁夫さん(四二回生)の乾杯で陽射しが差し込み明るい室内は一気におきやくモードに。盛り上がりも高知しながらで、同好会への参加を呼びかけ、近況を報告する声もだんだんと大きくなっています。

ますます元気な三回生の森健さんと吉本敏雄さんは、「素敵だなあ」「立派だなあ」と憧れる存在です。参加の多い三七と三八回生の勢力は七〇歳を超えているとは思えないパワーを持続中。年の初めに、健康を確かめ合い、また逝つてしまった友を想い、土佐高時代の武勇伝を懐かしむ筆山会。和やかな時間が参加者全員の心を豊かにしてくれました。

編集員



岡部直明さん(40回生) 黒川雄爾さん(37回生) 岩井千尋さん(42回生) 88回生の中谷君・川崎君も参加



八丁目	七丁目	六丁目	五丁目	和光
三菱東京UFJ銀行	銀座ライオン	GINZA SIX	みずほ銀行	三越
	Nikon プラザ			
土佐酒蔵		ルノアール		四丁目
三井ガーデンホテル	花屋	東武ホテル		

銀座 7-12-4 友野本社ビル地階
TEL 03-3545-3855 土佐酒蔵



清々しい明治神宮で1年の健康を祈願



土佐ハイクの会 池田勲夫さん（38回生） 百名山踏破



1995年38回生の会合で「50歳までに富士山に登ろう」「登ったことないろう」「しいいいき」の言葉で始まった富士登山の会は、酒席での打ち合わせばかりで、実行は2年後の1997年で、37・38回生主体の夫妻、子供連れで総勢28名の1泊2日の登山であった。登山後の反省会の折、飲んだら話はデカくなり、「買い揃えた装備もあるき、これから年1回百名山を目指そう」「山旅の後のビールはうまいぜよ」「会の名は土佐ハイクの会としよう」と反省会が発足会となった。



(左) 中島宏さん・百名山踏破の池田勲夫さん
(右) アルバム作成の沢村武彰さん

た。その後は尾瀬至仏山、乗鞍、立山等々錚々たる山に登り、ある時昼食で立ち寄った山の茶屋でハイクの会を俳句の会に間違われた不純な動機で11回目より俳句もやろうとなった。その後メンバーを増やしつ、20回を数え今日に至っている。

百名山を登ろうと決めた会ではある

が、手の届かないところもあり20年で15座がやっと。百名山と言われるだけのことあり、自主登山で百名山を目指すメンバーでも40座が精一杯。その百名山を昨年10月、池田君が踏破した。

池田君のハイクの会初参加は、2013年の第17回の蔵王、安達太良山（いずれも百名山）。高血圧とコレステロールの克服、アルツハイマーの予防のため、数年前からランニングをやり、血圧は正常に腹も凹んできた。これからはトレッキングで、山上からの景色や花々の素晴らしさに触れる喜び、爽やかな感動を味わいたいとの参加だったが、当初は山旅より速さを競い、後のビールのために登っているようだった。

百名山踏破を目標に決め、最初の2013年の7月から2014年11月までになんと合計56座。次シーズン4月から11月に26座。そして2016年4月から9月まで難関の17座合計99座を踏破し、あとは穂高を残すのみとなる。ハイクの会有志での百名山踏破祝賀登山計画は、メンバーの急逝もありはたせず。10月3日に穂高登頂を果たした。1座目から3年3か月で成し遂げた快挙であった。全くの素人であった池田君が、失敗と反省を繰り返し、百名山踏破し得たのは目標に向かう強い意志よりも、それに向かわせた山の総体的魅力と支えた健康な体であったと思う。

土佐ハイクの会も発足して21年目を迎えた。これからも山々の四季のうつろいのすばらしさを満喫するため続け、いつの間にか30年経っていたことになっているかも知れない、そうありたいものだ。

(38回生・中島宏)

土佐ハイクの会参加者募集 燧ヶ岳登山と ひうちがたけ 尾瀬ハイク 平成29年9月2日・3日

- 1日目 集合 7時15分
新宿工学院大学前
観光後 御池ロッジ泊
- 2日目 登山組は燧ヶ岳へ
散策組は尾瀬沼へ
解散 新宿 20時予定
- 大人 27,000円（1泊4食）
子供 15,000円

お申し込みは

池田勲夫 090-5553-1119
isao.ikeda_6230@song.ocn.ne.jp
中島 宏 080-5932-7272
n-hirojie@keb.biglobe.ne.jp

ご家族一緒にご参加ください！



江戸百景(十一)

神田明神

神田明神社の由緒に関しては、江戸期の資料もその後に書かれた書物も社傳を元にして書かれているようだ。社傳によると、天平二年(七三〇)創建とあるからすでに約千三百年を経過していることになり、江戸で最も古い神社ということになる。

場所は芝崎村(後の神田橋御門内、現在の大手町)にあったが、中古長く荒廃し、神燈既に絶えなるとするところを、徳治二年(一一三〇)二世遊行上人東行のみぎり、往古東国にて憤死したる平将門の霊を合わせて篤く葬り、神田明神と称えた。

現在に至るまで神田明神社の祭神は、恵比寿様、大黒様、将門様の三柱である。将門様は別にして恵比寿様・大黒様が主神なので、商売の神様として神田明神は江戸庶民の信仰を集めた。

江戸の氏子は神田明神と日枝山王神社に二分されていたと言っても過言ではない。

い。山王神社は徳川家の産土神(うぶすながみ)であり幕府に篤く保護されていた。神田明神は江戸市民の神様として主として江戸の町人に支えられた。

神田明神祭礼

神田・山王の両神社の祭礼は、江戸の二大祭りとして江戸の町民を二分して盛大に行われた。両祭とも、二年に一度盛大な「本祭り」を行った。間の年は静かな陰祭りで、派手な練物や神輿は出ない。

神田明神の祭礼は九月十五日と昔から決まっていた(現在は五月十五日に変更されている)。神田明神御祭礼と言えは、江戸前期から現代まで、何といつても本祭りの派手な賑わいに尽きる。各町より出された神輿や華麗な山車(だし)が多くの人々の目をひきつけたが、それを凌ぐほどの人気があったのが附祭(つけまつり)と言われた出し物であった。曳き物と呼ばれた巨大な張りぼての人形や踊り子を乗せた踊り屋台などである。

江戸の最盛期は文化・文政(一八〇四〜三〇)である。神田祭はここに空前絶後の盛況に達した。当時の書物「江戸名所図会」にも「練物だんじり等善尽くし美を尽くし、町中を引渡す。是一時の壯觀なり。この日都下の貴賤、棧敷をかけて見物す。・・・」とある。

幕末には江戸市民の内、零細商人や職人が「江戸っ子」を自負していたが、頭に血の多いのが、お祭りと言えは、分けて気が立つて、特に神田っ子の勢いは凄まじいものがあつた。本祭りの年になると夏前から気がそわそわし、仕事も身が入らず、何とか祭りに参加して騒ぎ立てたいと願った。自分一人の着る祭り衣装だけでも非常に高価だったが、借金して祭り衣装を調え、祭当日は朝早くから夜まで狂いまわった。職人の親方ぐらゐの顔役になると自分の娘に豪華な衣装を着せて踊り屋台に乗せて一日練りまわさせるのが最大の願いであつた。天保の頃、須田町に或る大工の棟梁がいたが、大借金して、神田祭の踊り屋台におのが娘を出す。祭が終わってから、どう算段してもその借金が返せず、とうとう九月の末に夜逃げしてしまつた。たぶん三百両もかかったであろうと噂された。市井の江戸人は利口でないにもせよ、お祭りとい



(上)歌川廣重「名所江戸百景」より「神田明神曙之景」(安政四年頃-1857年頃)。前掲図より十のぐらゐの明神境内の初日の出を眺めている。神官や巫女が日の建ち並んでいるところは「明神下」。野村胡堂の小説の主人公銭形平次は神田明神下に住んでいる「明神下の親分」と呼ばれている。



(上)江戸切絵図・尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)。神田明神社は江戸時代に入ってから、神田橋外、駿河台、湯島台と転々として、現在の宮元町(千代田区外神田)に鎮座するに至った。



(上)歌川廣重「江戸名所」より「神田明神」(弘化年間-1845頃)。神田明神は湯島台地の東端にあり、東側は崖になっている(葦簀張りの向こう側)。崖下は下町で「明神下」と呼ばれた。



(上)上図と同じ方向から筆者が撮影。今は明神下には大小のビルが建ち並んでいる。

夜逃げと一度にやる元気があつた。「江戸っ子は女房子供を質に入れても祭に出る」と言われたが、実際、女房・娘を質に入れて資金を得て、祭りに浮かれる連中も多かった。「質に入れる」はもちろん比喩である。天保の頃だが、この風潮を平戸の殿様松浦静山公がその有名な随筆(「甲子夜話」)で嘆いている「尤も歎ずべきは軽賤の者、祭礼用意の衣服等の料に支ゆるとて、妻娘を妓に売ること、頗る有と聞く、かかる風俗を見捨置くは、町役人の罪といふべし」。

その後の神田祭

明治に入つても、神田祭の本祭りでは、多くの山車や附祭が繰り出し、明治十七年頃までは維新前同様に盛況であつた。しかし追々道路上に電車の架線や電線が張り巡らされて、背の高い山車(花車、傘鉾等)は曳くことができなくなり、祭りの勢いは小さくなってしまった。

現代の神田祭は五月十五日を中心に行われる。二年に一度の本祭りは、昔江戸中が浮き立ったほどの賑わいとは言えなからうが、見物してみると、その喧騒・繁盛ぶりに驚く。今は山車は明神境内に一台ばかりで参考で飾つてあるだけで巡行はしないのだが、神輿の連合渡御の日

は百丁以上の町神輿が、日本橋、神田、秋葉原、御茶ノ水周辺に繰り出し、囃子屋台は、葛西囃子の伝統を引く神田囃子を、笛・太鼓、鉦で賑やかにし立てて、神輿と一緒に町中を練り歩く。特に連合渡御最後の、百丁以上の神輿の明神社への宮入りの光景は圧巻である。また徐々に伝統的な附祭も復活してきており、現代の下町っ子だけでなく見物の万人を熱狂させている。

『龍馬・元親に土佐人の 原点をみる』執筆余話

中城正堯（三十回生）

平成十七年に肺血栓（エコノミークラス症候群）で突然倒れ、救急車で昭和太藤が丘病院に運ばれた。危うく命拾いをし、一月半後に退院、退職した。この出来事が、本書執筆のキッカケである。

土佐中・高では新聞部活動に熱中、大学卒業と同時に学研・くもん出版と出版界に身を置いた。この間、日本民族学会に属し、毎年のようにニューギニア、シキム、ニアス島など海外の辺境に出かけ、『季刊民族学』『週刊朝日』などに民族探訪記を発表してきた。ところが、発病で酒と海外渡航がドクターストップとなった。この頃、郷里の実家に残されていた古文書や絵画史料を、高知市民図書館に「中城文庫」として収めることが決まった。史料整理・台帳作成のために、慣れない古文書と格闘せざるを得ない羽目になった。しかし、下級武士だった先祖の記録から、坂本龍馬夫妻の我が家との関連も理解できた。

こうして、民族探訪にかえて「中城文庫」を解説、郷土史関連の駄文を綴るようになった。浮世絵学会や日本城郭協会にも所属、新しい視点から郷土史に迫ることや新史料の発掘を心がけてきた。もとより歴史研究者でなく、編集者にすぎなかったが、尾藤正英・黒田日出男・小和田哲男など日本を代表する歴史家と接

してきたので、「門前の小僧、習わぬ経を読む」の心境で取り組んだ。歴史は史料で検証しつつ論じなければならぬが、持病を持つ身にとってありがたかったのは、国立国会図書館デジタルデータが、自宅や最寄りの公立図書館で自由に閲覧・複写できることであった。長宗我部のように離散した大名家の史料は散逸、県内の史料だけでは論述できないのだ。幸い、出版後は高知新聞で紹介してくれ、帯屋町金高堂書店でも週間売り上げベストテンにはいったとのことだった。出版の反響が、先日は九月に放送予定の

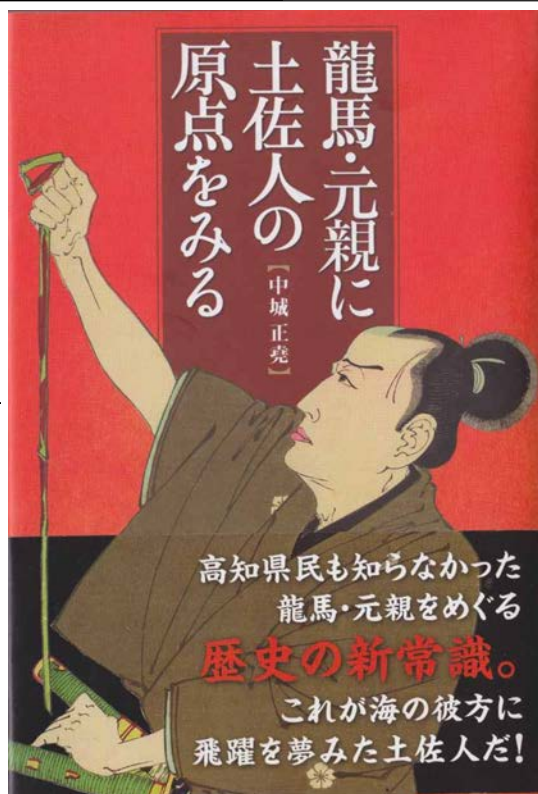
社会人大学院生として学んだこと

勝田千砂（七二回生）

二〇一五年の筆山五八号で、社会人大学院生になる抱負を執筆させていた

てはや二年がたちました。この春、無事に修士論文を書き上げ、大学院を卒業することができました。論文のピークは前号筆山の編集作業真っ最中。紙面構成担当としての役目をいっさい果たせず、編集長の中平さんにすべてお任せすることになり切ることができた次第です。この

NHK「プラタモリ」で、龍馬が潜伏した離れを撮影したいとの依頼があった。浦戸城の史跡保存の動きもあり、拙著が高知の歴史再発見や史跡保存につながることを願っている。



作さんに研究をさせてほしいと依頼しました。研究計画も何も決まっておらず、大した説明もできませんでしたが、「よくわからないけど何でもOK!」と快いお返事をいただき、土佐山地域でのフィールドワークが始まりました。

場を借りて、お礼申し上げます。

大学院は、平日の夜間と土曜日に授業がありました。働きながらの通学は大変でしょう、とよく聞かれましたが、仕事にメリハリが出て、時間管理が上達したように思います。つい残業してしまう...という方にはおすすめです。

土佐山アカデミーの取り組みに興味を持っていただいたことから、事務局長の吉富慎

土佐山地域で面白そうなイベントがあれば、時間を作って高知へと飛んでいきました。土佐山地域には企業や行政関係者など多くの人が出入りしており、移住者も多く、不思議な魅力のある土地のように思えました。そこで、研究テーマとして、土佐山地域の「人が巡る仕組み」と、「移住者が定着する秘訣」を説明することにしました。これまでのフィールドワークの出来事をまとめなおしたり、雇用者を対象としたアンケート調査を行って結果を分析しました。

研究の結果、土佐山アカデミー

が「エージェンツ」となって「人が巡る仕組み」を作ること、地域住民がヨソモノ慣れる状況ができており、移住者を受け入れるにあたって抵抗感が生まれにくいということがわかりました。雇用の分野で「組織社会化」という理論があります。これは、組織に新参者（新入社員など）が入ってきたときに、組織になじむようにするためのプロセスのことを指します。土佐山地域の研究から、この組織社会化理論を地域に応用できると考え、実証したのが「地域社会化」理論です。移住者を呼び込みたい場合、地域が何を整え、どのように受け入れれば良いか、というチェックリストも論文に添付しました。これにより、大学院で優秀論文賞を受賞することができました！

今ではすっかり研究にハマリ、研究生として大学院に残っています。引き続き、高知が元気になる研究を続けます。



出版レーダー

倉橋由美子 (29回生)

「霊:文豪ノ怪談 ジュニア・セレクション」
 <2017.4 ¥1728 汐文社>



田島征三 (34回生)

「あめがふるふる」
 <2017.5 ¥1512 フレーベル館>

大橋一章 (36回生)

「唐招提寺:美術史研究のあゆみ」
 <2016.12 ¥2700 里文出版>



塩田潮 (40回生)

「日本国憲法をつくった男 宰相 幣原喜重郎」
 <2017.1 ¥1058 朝日新聞出版>
 「田中角栄失脚:『文藝春秋』昭和49年11月号の真実」
 <2016.12 ¥907 朝日新聞出版>



西村繁男 (40回生)

「あからん:ことばさがし絵本」
 <2017.2 ¥1512 福音館書店>

黒鉄ヒロシ (41回生)

「色いろ花骨牌」
 <2017.5 ¥648 小学館>
 「もののふ日本論:明治のココロが日本を救う」
 <2017.1 ¥864 幻冬舎>

高山宏 (42回生)

「シェイクスピア・カーニヴァル」
 (翻訳)
 <2017.2 ¥1404 筑摩書房>
 「見て読んで書いて、死ぬ」
 <2016.12 ¥3456 青土社>



加賀野井秀一 (44回生)

「メルロ=ポンティ 哲学者事典 第二卷:大いなる合理主義・主観性の発見」
 (監修, 翻訳)
 <2017.5 ¥5832 白水社>

矢野龍彦 (46回生)

「みるみる音が変わる! ヴァイオリン骨体操」
 <2017.1 ¥1998 音楽之友社>



西田博 (47回生)

「矯正職員のための法律講座 (二訂版)」
 <2017.3 ¥3024 東京法令出版>

森岡正博 (52回生)

「33個めの石:傷ついた現代のための哲学」
 <2016.12 ¥778 KADOKAWA>



<¥3024 2017.1 港の人>

門脇護 (53回生)

(ペンネーム 門田隆将)
 「世界が地獄を見る時 ~日・米・台の連携で中華帝国を撃て」
 <2017.2 ¥1512 ビジネス社>
 「汝、ふたつの故国に殉ず:台湾で「英雄」となったある日本人の物語」
 <2016.12 ¥1944 角川書店>



英保未来 (54回生)

(ペンネーム 大森望)
 「村上春樹『騎士団長殺し』メッタ斬り!」
 <2017.4 ¥799 河出書房新社>
 「NHK ニッポン戦後サブカルチャー史:深掘り進化論」
 <2017.4 ¥1944 NHK出版>

森岡浩 (55回生)

「戦国大名「御家」系譜事典」
 <2017.3 ¥1080 宝島社>
 「日本の名家・旧家」
 <2017.1 ¥1296 洋泉社>
 「名字でわかるあなたのルーツ」
 <2017.7 ¥1296 小学館>

中城正堯 (30回生)

「龍馬・元親に土佐人の原点をみる」
 (本誌15ページに関連記事)



私の一冊

『90度のまなざし』

合田佐和子 (三四回生)

本書は六〇年代から晩年までに雑誌等に発表された執筆作品を収録し、幼少期の思い出や親交のあった芸術家との出来事などが自由な文章で綴られています。次女でコラーージュ作家の合田ノブヨさんが巻末で「普通の母親ではなかった」と語るように、二人の娘さんとの生活については昨今なら炎上するかも、と思うほどに世間体を気にせず「刺激的」な感性を披露しています。(遠藤瑞枝)